

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年6月13日現在

機関番号：23302

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2010～2011

課題番号：22792234

研究課題名（和文） 小学生への「赤ちゃん登校日授業」の実態とその有効性に関する研究

研究課題名（英文） A Study Regarding the True State and Effectiveness of “Infants’
Involvement in Experience Learning” on Elementary Students

研究代表者

伊達岡（和田） 五月（DATEOKA(WADA) SATSUKI）

石川県立看護大学・看護学部・助教

研究者番号：90509572

研究成果の概要（和文）：

「赤ちゃん登校日授業」によって、児童の親性（親になるための資質：本研究では「乳児への好意感情」「自尊感情」「共感性」とした）に対してどのような効果をもたらすのかを明らかにするため、授業前後に質問紙調査を実施した。その結果、乳児への好意感情が好転することが明らかになったが、自尊感情と共感性（情緒としての共感・行動面からみた共感）を高めるまでには至らなかった。また、関わり体験学習後の「ふりかえり・わかちあい」の授業についての学びを、体験学習サイクルの視点より質的帰納的に分析した。

今後は「ふりかえり授業」や「赤ちゃん親子との関わり方法」等を工夫することによって、自尊感情や共感性を高めるための授業を展開していくことが必要と示唆された。

研究成果の概要（英文）：

A written questionnaire was implemented before and after the instructional period in order to determine the efficacy of the “infants’ involvement in experience learning” program upon juvenile parental nature (characteristics for becoming parents according to this study were as follows: “feelings of goodwill toward the infant”, “feelings of self-respect”, and “sympathetic nature”). The result clearly showed that the feelings of goodwill toward the infant improved, but growth in feelings of self-respect and growth in sympathetic nature (both feelings of sympathy and behaviors that could be seen as sympathetic) did not occur. Analysis was also conducted, both qualitatively and inductively, from the perspective of the cycle of personal experiences, regarding the lessons learned in the class on “reflecting and sharing”.

Looking forward, the results implied the necessity to develop lessons, which would improve self-respect and student’s sympathetic nature, by improving instructional areas such as “reflection methods” and “techniques for improving parent-infant relationship.”

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2011年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
年度			
総計	2,100,000	630,000	2,730,000

研究分野：子育て支援・虐待予防

科研費の分科・細目：生涯発達看護学・小児看護学

キーワード：思春期教育、共感性、自尊感情、親準備教育、体験学習サイクル、赤ちゃん登校日授業、人格形成

1. 研究開始当初の背景

近年の育児不安・育児困難及び虐待に悩む親の増加の一因として、親となる以前の乳幼児との接触経験の不足が指摘され、学校教育において「乳幼児とのふれあいの体験授業」が行われるようになり、乳児への好意感情が好転することが明らかになっている。

一方、子どもを育てる性質を人間の発達課題ととらえ、「親準備性」「育児性」「次世代育成力」「養護性」などの概念で検討されつつあり、人間形成としての親性準備性の育成という側面からの取り組みも行われ始めている。

本研究課題においては、鳥取大学の高塚人志氏が考案した「赤ちゃん登校日授業」に注目し、人間形成としての児童の親性（親になるための資質）への効果を明らかにしたいと考えた。

2. 研究の目的

本研究の目的は、(1)親になるための資質を育む「赤ちゃん登校日授業」の効果を、親として必要な資質である「乳児への好意感情」「自尊感情」「共感性」を指標として明らかにすること、及び(2)赤ちゃん親子との関わり体験後に行われる「ふりかえりとわかちあい（以下、ふりかえり授業）」の授業における学びと（その効果）を明らかにすることである。

【赤ちゃん登校日授業の概要】

この授業は、小学生から高校生までの児童や生徒を対象とした人間関係構築力を学ぶ学習プログラムである。児童一人に対して1組の赤ちゃんとその親（以下、赤ちゃん親子）が1ヶ月に1回の登校を2～3回行うもので

あり、1クールは「事前学習」「赤ちゃん親子との関わり体験学習」「クラス全体でのふりかえりとわかちあい（以下、ふりかえり授業とする）」の3回で構成されている。「赤ちゃん登校日授業」の目的は、児童や生徒が基本的マナーをはじめ、コミュニケーション力、共感性、思いやりの心、クラスの仲間との信頼関係、自分の成長を振り返る事での命の尊さや親への感謝、役立ち感などの人間関係構築力を育むこと等が挙げられる。

3. 研究の方法

(1)「赤ちゃん登校日授業」が児童の親性に及ぼす効果

「赤ちゃん登校日授業」に参加した児童を介入群とし、「コミュニケーション授業」に参加した児童をコントロール群と設定した2群間を比較する準実験型デザインである（平成22年度は、介入群（小学生61名＋中学生22名＝83名、回収率：100%、有効回答率83%）、対照群（中学1年生39名、回収率：100%、有効回答率67.2%）と、対象者に中学生も混在してアンケートのプレテストを行った）。

①対象者

介入群はA県およびB県内における平成23年度「赤ちゃん登校日授業」実施小学校のうち、調査協力が得られた4小学校5学級の5年生164人と、1学級の6年生24人の計188名である。コントロール群は、B県内における平成23年度「コミュニケーション授業」実施小学校のうち、調査協力が得られた1小学校1学級の4年生19人である。「コミュニケーション授業」は、「赤ちゃん登校日授業」創始者である高塚氏が考案したビデオと講

義による授業であり、ねらいが前者と同様で「人間関係構築力」を培うことである。

②調査方法及び倫理的配慮

介入群は「赤ちゃん登校日授業」前（事前学習前）と、赤ちゃん親子との関わり体験学習後の毎回において質問紙調査を行った。コントロール群は、「コミュニケーション授業」の前後で質問紙調査を行った。

調査を実施する際に、本調査への協力は自由意思であること、匿名性が保たれること、データは統計的に処理され個人が特定できないように配慮すること、調査へ協力をしなくても学校の成績に不利益がないことを調査用紙の表紙に明記し、学級担任に児童が理解しやすい表現で説明を行ってもらおうよう依頼した。調査期間は、平成 23 年 5 月 11 日～7 月 5 日である。

③調査内容

- a. 乳児への好意感情：親性準備性尺度（佐々木ら，2007）の下位尺度「乳児への好意感情」
- b. 自尊感情：ローゼンバーグ自尊感情尺度日本語版（桜井，2000）
- c. 共感性（情緒としての共感性）：共感性尺度（武田ら，2005）
- d. 共感性（行動面からみた共感）：児童生徒用ソーシャルスキル尺度（SSM-I）の下位尺度「他者への配慮スキル」（杉浦ら，2007）

④分析方法

- a. 各項目の分布を見るために記述統計・正規性の検定を行った
- b. 「家族形態」「育児体験の有無」等の外生変数について差がないかを比較するために、 χ^2 検定を用いて分析した
- c. 2 プログラム前後の変化パターンに差があるかを比較するため、2 群（介入群と対照群）ならびに時間（プログラムの前後）の 2 要因による二元配置分散分析を行った
- d. 介入群における事前学習前と各関わり体

験学習後の経時的推移を見るために反復測定による一元配置分散分析と多重比較法のボンフェローニの方法を用いて分析を行った

(2) 赤ちゃん親子との関わり体験後の「ふりかえり授業」での学び

赤ちゃん登校日授業は「体験を通して学ぶ」ことが大きなポイントであり、それには自分の体験を吟味し、理解することが重要である。そこで、ふりかえり授業の際に児童が記載したワークシートの記述内容を体験学習サイクルの視点で質的帰納的に分析した。

4. 研究成果

(1) 「赤ちゃん登校日授業」が児童の親性に及ぼす効果

介入群・対照群の全員より回答があり、有効回答数は介入群 82 人(有効回答率 43.6%)、対照群 12 人(有効回答率 63.1%)であった。

①対象者の属性（表 1）

家族形態では、コントロール群に比べて介入群に核家族が多く見られた。育児経験については、両群の殆どの児童に育児体験の経験があった。

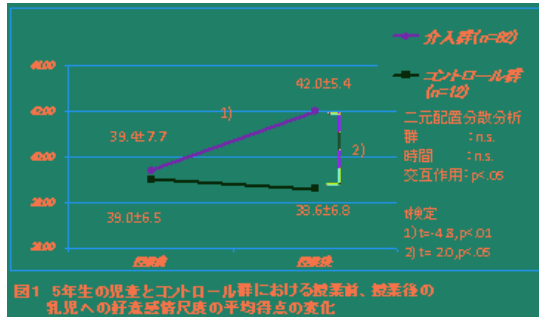
属性	介入群 (n=82)	コントロール群 (n=12)	χ^2 値	P 値
学年				
4年	—	12人 100%	—	—
5年	77人 93.9%	—	—	—
6年	5 6.1	—	—	—
性別				
男児	40 48.8	6 50.0	—	—
女児	42 51.2	6 50.0	—	—
家族形態			4.8	.043*
核家族	60 73.2	5 41.7		
核大家族	22 26.8	7 58.3		
兄弟の有無			—	—
いる	68 82.9	10 83.3		
いない	14 17.1	2 16.7		
出生順位			0.4	.797
長子	39 47.6	5 41.7		
中子	14 17.1	3 25.0		
末子	29 35.3	4 33.3		
育児体験			1.7	.283
あり	61 74.4	11 91.7		
なし	21 25.6	1 8.3		

Fisher の直接確立法 (2×2 の場合のみ) p < .05

②介入群とコントロール群の授業前、授業後の各指標得点の変化の比較

a. 乳児への好意感情得点の変化の比較

授業前と授業後の好意感情得点の変化に両群間には有意な差はみられなかった。しかし、交互作用が見られたため全水準ごとの差の検定を行った結果、介入群において授業後の得点が授業前に比べて有意に高かった。また、コントロール群の授業後の得点に比べて介入群の授業後の得点が有意に高かった。



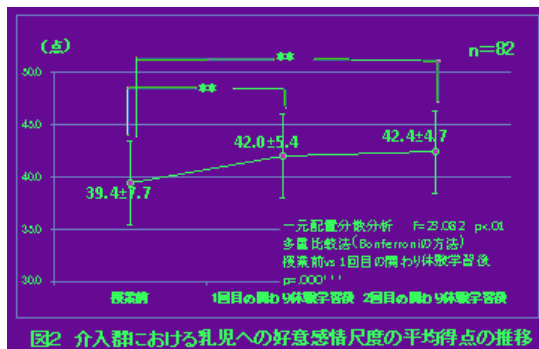
b. 「自尊感情得点」及び「共感性（情緒としての共感性・行動面からみた共感）得点」の変化の比較

授業前と授業後の各尺度得点が介入群とコントロール群の群間において差がないかどうかみたとところ、両群における得点の変化に有意な差はみられなかった。

③介入群における授業前、1回目の関わり体験学習後、2回目の関わり体験学習後の各指標得点の推移

a. 乳児への好意感情得点の推移（図2）

授業前に比べて、1回目の関わり体験学習後の得点が、また授業前に比べて2回目の関わり体験学習後の得点が有意に高かった。



b. 「自尊感情得点」及び「共感性（情緒としての共感性・行動面からみた共感）得点」の変化の推移

授業前、1回目の関わり体験学習後、2回目の関わり体験学習後の3時点での得点には有意な差がみられなかった。

(2) 赤ちゃん親子との関わり体験後の「ふりかえり授業」での学び

ふりかえり授業で使用されるワークシートは「パートナーの表情をよく見ることができたか」等の10項目（6段階リッカート）の質問と、「赤ちゃんとの関わりをふり返って」「お母さんとの関わりをふり返って」「仲間（クラスメイト）の関わりをふり返って」「自分自身を振りふって」の4つの自由記載の項目に分かれている。この4つの項目毎に分析結果を整理した。今回は、結果の一部を報告する。

①パートナーのお母さんとの関わりを振り返って児童が学んだこと（抜粋）

a. 「母は赤ちゃんが言葉を話さなくても気持ちがよく分かっている」という学び（図3）

【お母さんは赤ちゃんのことをよく知っている（知り尽くしている）、赤ちゃんの気持ちが分かっている（認識）】ため、【お母さんはすごい（関連づけ）】という気づきがみられた。その気づきより、今後どのようにしていきたいか（応用）という発想への発展はみられなかった。

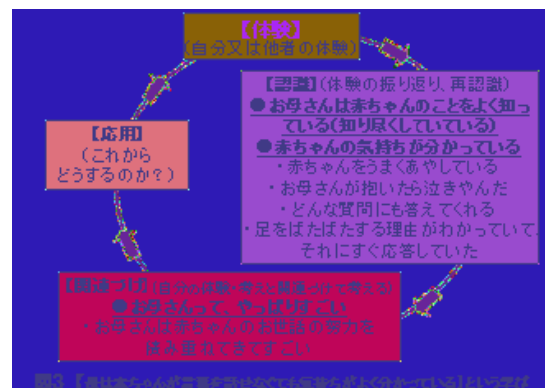
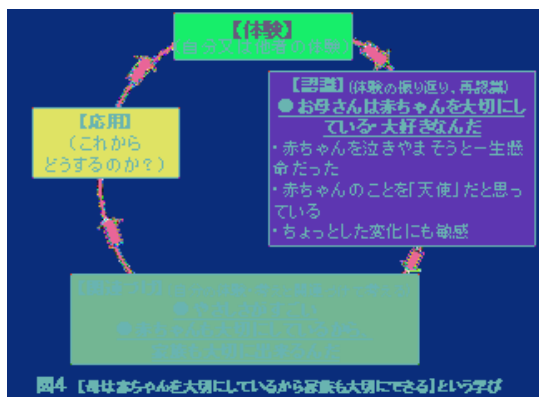


図3 「母は赤ちゃんが言葉を話さなくても気持ちがよく分かっている」という学び

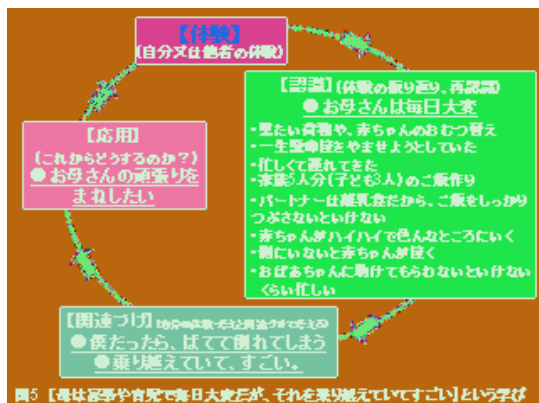
b. 「母は赤ちゃんを大切にしているから家族も大切にできる」という学び (図4)

【お母さんは赤ちゃんを大切にしている・大好きである (認識)】から、【お母さんのやさしさは、すごい。赤ちゃんも大切にしているから家族も大切に出来る (関連づけ)】という気づきがみられた。その気づきより、今後どのようにしていきたいか (応用) という発想への発展はみられなかった。



c. 「母は家事や育児で毎日大変だが、それを乗り越えていてすごい」という学び (図5)

【お母さんは家事や育児で毎日大変 (認識)】であり、【自分だったら倒れてしまうが、それを乗り越えていてすごい (関連づけ)】と感じ、【お母さんの頑張りを、自分もまねをしたい (応用)】という学びがみられた。



体験学習サイクルは「自分の体験を再認識する」→「自分の体験を見直す(気づきや吟味、学びに繋がる)」→「学んだことを応用

する」という流れ、或いは「他者の体験を認識する(どんなことが起きたのかを詳しく知る)」→「他者の体験を自分に引き寄せて考える(関連付ける)」→「学んだことを応用する」という流れであり、自分や他者の経験を通して学びを深める循環的なプロセスである。

今回の結果を見ると、ふりかえり授業での学びは、「関連づけ」で止まっていることが多かった。お互いの体験を共有し、そこから学ぶときには、「関連づけ」は他者の経験を自分に引き寄せて「自分だったらどうするか」「どう思うか」と考えることによって、他者のものの見方や対応に触れ、新たな気づきや吟味・学びにつながる。そして、その学びを次に応用してやってみることによって発展していく。今後は、このような体験学習の思考プロセスを促すような授業のファシリテーションを行うことによって、お互いの体験を共有した学びがより深まると期待される。

(3)まとめ

乳児への好意感情が好転することが明らかになったが、自尊感情と共感性(情緒としての共感・行動面からみた共感)を高めるまでには至らなかった。今後は「ふりかえり授業」や「赤ちゃん親子との関わり方法」等を工夫することによって、自尊感情や共感性を高めるための授業を展開していくことが必要と示唆された。

また、「ふりかえり授業」では、児童が他者の経験を自分に引き寄せて考え、そこから新たな気づきや学びを得て(関連づけ)、学んだことを応用していけるようなファシリテーションを行うことによって、児童がお互いの体験を共有し、学びをより深めることができるのではないかと期待される。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計0件)

〔学会発表〕(計0件)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

伊達岡(和田) 五月

(DATEOKA(WADA) SATSUKI)

石川県立看護大学・看護学部・助教

研究者番号：90509572

(2) 研究協力者

風間 邦子 (KAZAMA KUNIKO)

石川県立看護大学博士前期課程修了